

授業創造過程は、まさしく共同参画型社会である！

熊本市立出水南小学校教諭 村上浩一

学校現場では、昨年度より「総合的な学習の時間」（通称、総合学習と呼ぶ）が設けられた。これにより福祉教育の授業も長いスパンで取り入れることができるようになった。ということは、今までの「創意（ゆとり）」の時間や道徳の時間、特別活動における学級活動の時間等々でやっていたような「付け焼き刃的な授業」とは、決別しなければならないということなのである。

「付け焼き刃的な授業」とは、例えば次のような授業である。

障害者の方々に講話をして頂き、感想を書いて終わりというパターン。

障害者や高齢者の疑似体験をし、その感想を書いて終わりというパターン。

点字や手話を習って、感想を書いて終わりというパターン。

各種福祉施設を見学し、感想を書いて終わりというパターン。

総合学習の最終のねらいは、「学び方やものの考え方を身に付け、（中略）自己の生き方を考えることができるようにすること。」（文部科学省＝小学校学習指導要領より）である。前掲4パターンの福祉教育の授業では、しないよりはましたが、「自己の生き方」には最終的にはつながらないだろう。その理由は簡単である。

何のために学習をしているのか

という視点が抜け落ちてい

るからである。この学習目標がしっかりしていれば、前掲4パターンのような軽率な学習には結びつかないはずである。例を挙げてみよう。

この学級には、車椅子を使っておられる保護者がいるとしよう。例えば、授業参観は可能なのか。自分の親が同じ立場だったら、どうするか。あるいは、自分が車椅子の生活だったら、どうだろうか。このようなことを考えられる子どもたちに育ててほしい。というようなねらいを教師が持ったとしよう。

そうだとしたら、どんな授業がベターだろうか、と考える。仮に、障害者の方に講話をして頂くとしても、その話は、単元の最初がいいか、途中がいいか、最後がいいか、そこまで考えなくてはいけないのである。つまり、障害者の方の実際の話を実単元の最初に持

ってきて、意識付けをさせたいとか、単元の途中でどんなところに「壁」があるかを聞くとかである。あるいは単元終末時に、私たちはこんなことを考え、教育委員会に相談に行ったが、これでよかったのか、もっといい方法があるのか、本当の気持ちを聞かせてほしいという意味で、話を聞くとかである。

安易に、障害者の方に「いつ、どこどこで、何でもいから体験談を」なんてもっていったはいけないのである。教師に問題意識がない場合は、子どもたちも問題意識を持っていない。話の要請を受けた障害者の方も問題意識をもてないまま、講話を仕方なしにしてしまうことになる。この結果、どうなるか。

子どもたちは、「障害者でなくてよかった」という感想を持ちがちになる。これではねらいも何もあった

ものではなかろう。本末転倒である。「障害者でなくてよかった」というようなことを考えさせるような授業のねらいではないはずである。

さて、このように話を聞くことだけでも、「何のために学習しているのか」という学習目標がしっかりしていれば、あるいは学習目標が違えば、聞く時間帯（最初か途中か終末か）も変わってくるものなのだ。

つまり、話一つをとってみても、綿密な学習目標や計画を立て、その上で障害者の方々と意見交換をし、よりよき講話や体験になるよう、仕組んでいく必要があるのだ。

最初に、学習目標ありき

なのである。最初に「講話要請」ではないのだ。

こんな授業をしてみたい。

それで、こんなことをする予定なのだが、どうしてもその過程で「講話」（疑似体験、活動等）が必要なのだ。だから、協力をして頂きたい。

というようにもっていきたいものである。

ここから、障害者の方との協議が始まるのだ。その途中では、我々教師の視野にはないような指摘やアドバイスを頂いたり、逆に学校教育や児童の発達段階や実態等々の話をするようになるだろう。

この協議事項そのものが授業のヒントとなっていくし、我々の肥やしとなっていく。かけがえのない時間帯であると考え。この時間をとっていない協力依頼は、上滑りの授業となり、三者（教師 - 子ども - 協力者）が「満足感」のない消化不良の授業となってしまうだろう。逆に、この時間帯をとっていたら、きっと

失敗したとしても、お互いの記憶に残るような授業となるだろう。

私は、思う。

この時間帯というか
過程こそが「共同参画
型社会」になっている

と。これは、何も障害者の場合だけではない。高齢者のことを考える授業に、お年寄り抜きではいけないだろう。それと一緒にである。もちろん、学習目標によりけりだが。

子どもたちも、この大人の共同で授業をつくり出していくという後姿を見て、よりよい「自己の生き方」を考えていくのではなからうか。このような授業後の感想では、「障害者でなくてよかった」という感想は生まれてこないはずであると確信する。

私も大きなことは言えない。過去に、このようなこ

とをやってきているのである。このレポートは、自分への戒めを込めて書いているところである。逆に、参考になれば、これ幸いである。

